



佐藤念腹

念腹句集

序

高濱 虚子

念腹君は昭和二年三月に日本を出帆して、ブラジルに渡航し、今日まで二十六年を経過した。その出発にあたりて私は左の三句を餞けした。

東風の船着きしところに国造り

鋏取って国常立の尊かな

畑打って俳諧国を拓くべし

虚子

風貌漠々たる念腹君は、その妻子や弟を連れて、漫

然として旅立って行くものの様に見えた。彼が果して移民団の一人として成功するものであらうか、どうであらうか、といふ事は予測する事が出来なかつた。又私にそれを予測する力も無かつた。只念腹君は新潟の片田合に在って俳句を作つてゐた。その俳句には異色があつた。力があつた。普通の俳人とは違つてゐると思つた。それ丈の事は知てゐた。そこで私はブラジルに渡つて土地を開拓する一人として努力はするであらうが、それよりもブラジルには恐らくまだ芽生えてゐないであらう俳諧の種を蒔き俳諧の畑を拓く事は必ず成功するであらうと考へて、これらの句を餞としたのであつた。「国づくり」と言つたのも銃を取つて国を征服せよといふのではない。「国常立の尊」といふのも国を創めた尊といふ意味ではない、俳諧の国をつくれ俳諧の畑を作れといふ意味であつた。俳句を愛好し俳句を作る人を養成せよといふ意味であつた。私は此の三句を以て念腹君の壮行を祝福したのであつた。

爾采二十六年移住民の一人としても相当な成功を収めつつあるといふ事を聞く。が、それよりも俳句を教へ俳句をひろめ、いわゆる俳諧国を打立てたと

いふ事に依って、念腹君のブラジルにおける功績は大いなるものがある様である。それによつて移住民の徳育美育の上には大いなる感化があるようである。その間に幾多の起伏はあつた事と思ふけれども、又瓢骨、圭石等の先輩が多少はあつたにしても、殆ど今日のブラジル俳句界を創設したものは念腹君の力といつてよからうと思ふ。布教の上で布教師や伝導師といわれる者が、如何に辛酸をなめるか。それと同じく俳句をひろめる上に於いてもまた相当の苦しみをせねばならぬことは当り前の事である。然し彼は殆んど休む暇もなく遠距離の各地を廻つて、常に俳句の布教（？）に携つておると聞く。

彼の素裸にして強靱な性格は克く困苦に堪えて今日に來たものと思ふ。

日本内地の俳句界の或人々の影響を受けて、たまに念腹君に反対する者も生じたようであるが、念腹君は一向それらに頓着なく、己れの信ずる所を敢然として押し進む事によつて、それらの人も何時の間にかその傘下に帰依したといふことを聞く。

強東風のわが乗る船を見て來たり

念腹

此の句は日本を離るるにあたって、如何なる船であるか、その乗る船を見てきたといふ句である。心は雄図に燃えながら多少の心細さ淋しさも、伴つてゐるその時の心持を想像することが出来る。旅中の句に、

シンガポール

日曜や扉に凭れ昼寝人

印度洋

むらさきの流星垂れて消えにけり

念腹

この二句の如きは誰も航海をする時に経験のあるぼんやりとした日々を送りながらもその心の底には一抹の淋しさを蔵するものといへる。

かくの如く一々句を点検していったならば際限ない事であるが、試みにブラジルに渡つて後の牛馬に關する句を二三句抜き出してみるならば、

夏草や投縄牛を獲つつ行く

切株に木菟ゐて耕馬不機嫌な

どやしたる耕馬かなしく鼻取りぬ

犬居りて牛喜ばず牧焚火

早魃や牧馬も斃れはじめしと

馬にのる拍車結へし跣足かな

馬の背の籠にあたりて燕来る

転耕を見送るや馬とばしつ

干布囲野狩の牛の戻り初む

肉馬車を追うて地を翔つ秋の蠅

耳削ぐも風邪の年の手当てとや

騎初を追う子倅の裸馬

春雷や二人乗ったる馬に鞭

花珈琲門入りてなお馬に鞭

念腹

これらはみな同じ牛馬でも日本とブラジルとは異った趣のあることを会得せしめるのである。

如何に念腹君の俳句が生を写し生を描くかといふ事はこれらの句を一見してもわかるのである。ブラジルの天地、かつ生活といふものをこれらの句によつて窺ふ事ができる。

ブラジルの生物は日本内地のものとは大分違ったものがあるやうである。たとへば蜥蜴といふものも

日本の内地で見る様なものではないらしい。

腹這うて犬も飽きたり蜥蜴狩

蛇蜥蜴からみ搏つなり草の中

投槍に飛びつく犬や蜥蜴狩

蜥蜴狩びっこの犬も勢子のうち

念腹

又、汽車そのものには変わりは無いにしても・それ
に関するものには、

豚の群退ひ立て移民列車着く

枯野より犬這入り来ぬ汽車の中

汽車へ来て菓子購へる枯野かな

陽炎へる線路へ汽車を降りにけり

念腹

の類で、日本内地の汽車よりも蓬かに趣を異にして
ある事を知る。これ等もブラジルの天地から彼が写
し取ったノートの絵である。

更にブラジルの天地に養はれつつある人間を描いた句となると左の如きものがある。

毛布背負ひ日覚時計さげてゆく
開拓のはてが籠編む夜なべとは
汗寒く恐怖なしつつ争へり
木蔭より人躍り出ぬ野路夕立
煉瓦工みな少年や春の風
ズボンの娘モンペの母と井戸端に
息白く言葉短かに気むづかし
老いてゆく犬に朝寝の妻若し
彼の背我を睨める焚火かな
汲み終へし深井にもたれ春惜む
深井汲む女かはりし蝶々かな
移民妻わらびを干して気品あり
汽車に会ひ牡蠣飯に又日本人
蚊食鳥ニグロ嫁とる灯の軒に
野焼人沼をわたりて集ひけり
ブラジル陋巷はなし新豆腐
襟巻きや神父と競う拓士髯

瓜漬を食ひ結飯食ひ珈琲飲む
病人も腹減りしとぞ草の餅

何れもみなブラジルに於ける特異な生活を想像する事ができる。写生の筆が鋭くして別に巧む事もなく、その心に映ずる所のものがそのままに句になつてをる。

彼に

虚子門に無学第一灯取虫

の句がある。夫子自身を言ったものか、或は他人の事か。試みに夫子自身を言ったものと解してみれば、自ら第一の無学を以て居るようであるが、たとひ書物を読む事はすくなくとも、彼はブラジルの大自然といふ大いなる宝庫を蔵してゐる。之は一大文章である。彼は写生といふ事を信じてをる。この信は堅い。これによって人を導き自分も進んでをる。彼の俳句を説く言葉は恐らく饒舌ではあるまい。極めて簡明なものであらう。曰く写生。

信あれば文は短し秋灯下 念腹

昭和二十七年十二月九日 鎌倉草庵

念
腹
句
集

見返し、扉
川端龍子

装本
花森安治

昭和二年

強東風のわが乗る船を見て来たり

移民船はわい丸

長崎や船に戻れば見ゆる花

香港

五月雨や客も洗足に支那車

西貢

日盛やとりまく車夫にたち止まる

シンガポール二句

日曜や扉にもたれ昼寝人

餞投げぬ船をあざけり泳ぐなり

インド洋

むらさきの流星垂れて消えにけり

ケープタウン

秋晴や胸にとびつく花売女

サントス所見

菊咲くを友もみつけて垣間見る

移民列車衝突

土くれに蠟燭立てぬ草の露

木洩れ日や桶にとりつく秋の蝶

朝露や袖開き干す日本服

八方に流るる星や天の川

腰かくる木に燃えうつる焚火かな

背負籠のうちあたりたる枯木かな

王蝶の閉ぢし翅をめぐる蝶

春雷や拓きし土を守り住む

轉りやただ切株の海とのみ

空うつる木根が上の桶清水

井鏡やかんばせゆがむ昼寝起

雷や四方の樹海の子雷

柚の戸を出でし獣や夕立あと

立てかけて木にある戸かな夕立中

芥火や向き直りたる蝦蟇

食膳やとりわけ父母の日焼けたる

日盛や垂れたる蔓のかげの花

昭和三、四年

たちまちに月の友あり集ひけり

倒れ木の上の胡坐や稲光

稲刈るや大三十日蒔き二日蒔き

稲刈るや畑見に来る新移民

暮れ方の釣瓶下して芋洗ふ

石木に斧うちあてぬ秋の山

草刈つて庵の風みち作りけり

秋風や相見失ふ野良の人

渡り鳥わが一生の野良仕事

蜻蛉や昼餉の卓のもたせ鍬

斧うつや口をあけたる露の幹

倒したる大木の上の今朝の露

塵取に掃き込まれけり露の虫

夜の幹に人かくれる焚火かな

蝶舞へる中をかき分け通るなり

蝶々や大切株の間のみち

人深く居りて花咲く珈琲園

露の戸の幹にさはらず開きにけり

昭和五年

総出にて隣畑も仕事初め

夕立や撲ちて止まざる柵の豚

野良合羽用意あるなり秋夕立

夜毎満つ樹海の月や秋旱

湯浴みして今日の日焼の加はりぬ

仰向いて啄木鳥にかへり見られけり

力業腹へおとせる寒の水

井を汲むや人もなげなる大蜥蜴

箒目へのびて葉を置く瓜の蔓

除草女の祈るが如し立憩ひ

昭和六年

伯人の十人程と初笑い

日曜の剃刀あてる日焼かな

切株に鎌かけ憩ふ陸稻刈

大蜥蜴芭蕉の垂葉かむり居り

芭蕉葉の蔭の伏せ犬蜥蜴狩

蜥蜴狩百姓靴に踏まへたる

蟻の道流るゝ如くかゝりけり

蟻の荷の中継してぞ運ばるゝ

螢火や戸にもたせある夜の鍬

蟻地獄切株の影なくなりぬ

近々と声をさめけり森の鹿

上枝より降るが如くに珈琲もぎ

薪のせし頸ふり向けぬ冬木道

霜害二句

霜害や起伏かなしき珈琲園

霜害や犬の如くにさまよへる

野火暮るゝ切株燃えてをりにけり

鉄の木と云ふが芽吹きぬ牧の内

昭和七年

当番の移民が配る賀状かな

漏り減りのして届きけり樽清水

手伝いに来しこの家の長昼寝

夏虫や舞台追はるゝ迷ひ犬

乗入るゝ馬あきうどや庭昼寝

瓜盗人野獣ならめとうそぶきぬ

夏草や野辺の送りの脚絆がけ

牧の径露払ひなる馬に従き

甘藷掘をのぞき貌なり柵の豚

牧の牛歩みて霧の中にある

秋燈や戸口のかたに眼をやれる

今日の月椰子と芭蕉の庵かな

忘れぬし月日めぐりて牧の露

草の実や百姓ズボン筒の如

果しらぬ森を後ろに夜長宿

棉ちぎる農も賭博や移住祭

遠き人足はこび行く谷紅葉

萱刈の結飯貰うて犬もあり

鍬使ひこまかくしてぞ秋除草

日雇いも減らすことなく秋除草

箆のものぶちまけしごと渡り鳥

虫啼くや竈火照らす囲ひ板

霧まぎれ幹がくれして野辺送り

珈琲樹にもぐり宿りや秋夕立

生まなまと時雨の後の糞の跡

日に次いで雲ます月や雨期近く

伸びたちし枝にかためて花珈琲

歩み居る豚の背にとぶ春の蝶

草深し人声に似て虻の昼

野良煙草してひまな手の虻を打つ

塔の影むらがる蝶に伸びてゆく

切株の鳥かはり居り種を蒔く

森こだまして機嫌よき種蒔機

遅き日や切株にたつ虫柱

昭和八年

薰風や胴張りの幹瓶のごと

虹立つや少年すへる野良煙草

雨期あけや地面の黴びの大模様

森暑し花仙人掌に雨降れど

涼風のおが馬森を離れ居り

翅の斑の陰濃くとまる蜻蛉かな

風吹いて色かはりけり露の玉

又丘の現れて月低くなる

藪を吹く風やあけたる無月の戸

秋風やともしび遅き百姓家

早稲の香や家々が滑す早寝の灯

立待や森の穂を出ず星一つ

渡り鳥仰ぐ草刈遅れがち

日雇と朝寒の顔合せけり

幾枚も柄の重なれる落葉かな

豚の群追ひ立て移民列車着く

切株の燃えて地くゞる焚火かな

遠く行くつむじは高し珈琲摘

夕焚火してゐて宿を乞はれけり

汽車へ来て菓子購へる枯野かな

寝そべりて尾を振り合へり猫の恋

種蒔くやつなげる馬を押のけて

春雷や家鳴きめぐる七面鳥

森出づる蝶の流と云ふべきか

昭和九年

木蔭より人躍り出ぬ野地夕立

投槍に飛びつく犬や蜥蜴狩

一人づゝ這出て小屋の夕立晴

井戸端の母と離れて螢追ふ

大汗をかいて鍬軽くなりけり

仙人掌の咲増す夜々に月遅く

蜥蜴狩びつこの犬も勢子のうち

雨あがる月に向いて蝦蟇の鳴く

柚小屋の月よしとてや放つ銃

秋蚕飼うて俳書久しく借りにけり

顔のせて芭蕉葉食めり親子山羊

芭蕉葉の露なだれうつ蔀かな

秋風やひねもすけふる開墾地

日雇いの乗り来る馬も肥えにけり

雨来とて犬すり寄れど棉を摘む

新藁にのぼりて鶴を仰ぎけり

処女林の紅葉の下に耕せる

犬の貌来てゐる月の寝椅子かな

鹿かくれ人現れし紅葉かな

椅子の上に胡坐をくんで夜なべかな

荷の豚を鞭ちもして枯野馬車

冬ぬくし牧場めぐりの汽車の旅

日向ぼこ行きたる荷馬車戻りけり

短日や先だち戻る野良の馬

短日のテーブルの端借りて読む

蝶々のもつる、羽音ありにけり

野良昼餉とりつつ春を惜しみけり

乳袋かけたる山羊や春の泥

春霜や大切株に火かけたる

豚の親春霜の藁くはへ居り

春の風耕馬を叱る口中へ

夫婦して稼き餓鬼なり野良遅日

わが家の見えて日ねもす蝶の野良

たんぽゝの土嗅ぎゐしが馬交る

戸に侍りて山羊の鳴き居る朝寝かな

繕ひの草食せあり種蒔機

昭和十年

夏の月家路は馬のとるまゝに

根切虫花もち初めしもの許り

足裏を砥め去る豚や庭昼寝

夕蝦蟇の掃きこかされて納屋を出づ

夏の月にそむきて椅子の二人かな

夜の鳥の蚊帳にあたりて失せにけり

虹立つや音なく開いて牧扉

大蜘蛛のあらあらしくも罅つくろい

蜘蛛の罅に吹き戻されぬ風呂煙

牛の群に行あたりたる夏野かな

新藁にもたれかゝりて野良珈琲

貧乏の酒さめ易き夜長かな

威し銃放ってはじむ陸稻刈

黍 襖一ぶくの煙あがりけり

隠れなく通ひ路遠し大根馬

釣瓶置く石を包みて芝枯るゝ

冬耕や堅き糞して馬達者

切株に木菟ゐて耕馬不機嫌な

あらはるゝ起伏々に耕せる

大いなる嘴仰向きに轉れる

春風や通る小父ちゃんみなニグロ

祭日のよくある国に耕せる

煉瓦工みな少年や春の風

陽炎や切株掘って庭づくり

風に向いてなげうつ如し棉を蒔く

糶足らぬところ唐黍蒔いて置く

春風があけし柴の戸通りけり

春眠や鞍を枕に牧夫達

仮小屋も日本の好み春めける

花大根野良に戻れば雨はるゝ

春惜む人道連れの出来にけり

住み古りて仮屋ともなし春惜む

春雷や二人乗ったる馬に鞭

昭和十一年

野路夕立乙女に走り越されつゝ

瓜一つ掌にして菜の手入

喜雨の戸の支への鍬も目出たけれ

行水に遠きともし灯歩き居り

戸を出でて仙人掌の日に合掌す

瓜盗むみちはるばるとつけてあり

日雇いと短き昼寝覚めにけり

灼け畝のさめて再び洗足かな

夕蝦蟇の這出づる戸に戻りけり

開墾もその日暮しよ秋の風

身ぎれいにして女房の夜なべかな

物干して庭走り去る残暑かな

牛怪我し馬病む牧の残暑かな

足音の馬にもあらず蚯蚓鳴く

野仕事に暮るゝが好きや天の川

膝をつき胡坐もかいて棉摘める

銀漢や山羊臥し揃ふ庵みち

薪小屋へ寝にゆく男夜長かな

雇ひたる異人も移民棉の秋

手によせて夜なべの塵の一と握り

食ひさしの木瓜ころがり今年藁

森の雲なくなりしより朝寒し

柿落葉搔出す臼の深さかな

新藁を踏んで傾く山羊車

道焚火してあり森に斧を打つ

頬被りするよりあげて馬車の鞭

階段を下り来る狎や冬さうぴ

入口に立ちて飯食ふ枯野宿

小うるさき最合の井戸の滴れにけり

樹頭を蜘蛛手にわたり蔓枯るゝ

大斧に敷かれて草の返り花

腰刀ぬくより甘蔗刈はじめ

甘蔗園蝕む如く刈合へり

冬蠅や乞食よぎる汽車の窓

四方より攻むるが如く樹海焼く

樹海焼く煙曇りといふを行く

緋の毛皮掛けたる鞍や春の風

少し降る雨あたゝかし珈琲畑

春雨や女尊の国の催合傘

椰子の風吹き定まれり野を焼かむ

牧の柵くぐり出て汲む春の水

かつぎ来て春水を汲む長柄かな

森襖隔てゝ新馬叱り合ふ

汲み終へし深井にもたれ春惜む

昭和十二年

腰帯に溜れる汗を落しけり

夕虹や鋤遊びして移民の子

ひと時を牛こぞり来て蒲の花

鎧戸を矢玉と打つは森の火蛾

木の間くる蛾に提ランプ急ぎけり

群鳥は野辺の腐肉に蛇は樹に

飛ぶ蝶に跳ね出て草の蜥蜴かな

晴耕雨読移民めでたし喜雨休

開墾に負けて喜雨でもなかりけり

言わけをして同胞の汗乞食

吊床の下山羊よぎり豚臥せる

鍬先を毒蟻チチと鳴き散れる

寝ころべる足あげて追ふ羽抜鶏

秋風や合掌に組む移民小屋

ブラジルは世界の田舎むかご飯

馬の尾を玉と結へて露に発つ

棉摘や稲の不出来にうち励み

秋晴や禪干さぬ異人小屋

買物のついで埴えたり農の秋

秋風を寒しと思ひ牧を守る

月ありと云へど牧舎の道遠し

棉明りして豊年の夜の径

ここへ来て葡語又違ふ夜学かな

霧に打つ鍬遅れじと進めけり

革袋つけたる馬も露に発つ

皿洗ふ音に野鹿の来て遊ぶ

小屋を出て移民冬木の鳥を撃つ

牛車来て立はだかれり日向ぼこ

門入れば耕主の国や花珈琲

鄙びつゝわが娘育つや花珈琲

春泥やかついで長き馬車の鞭

陽炎へる線路へ汽車を降りにけり

深井汲む女かはりし蝶々かな

春月の恋のベンチの端借らむ

気短き言葉わかりて新馬かな

昭和十三年

緑蔭やむらがる牛を撫であかず

除草唄友よ進めと訳さるゝ

拓く野に鍬預け去る螢かな

朝涼や幹に角磨ぐ牧の牛

絵扇に狎の顔をポと叩く

片蔭の日本人街通り飽き

炎天や国見短く塔は古り

遊び舟みなカノアなり布袋草

跣足にも傷の棘のと老来たり

野良の靴脱いでは蚤を払ひけり

背を擦る牛のたわめし新樹かな

棉蒔くや羽蟻の群に捲かれつゝ

暮雨冷えの養鶏の損言ふ勿れ

午睡馬野良へ出る綱かゝりたる

水を打つ脛にのぼる土間の蚤

わが部屋の貫ひ明りに来る灯虫

火取虫井戸よりあがり来るもあり

馬上涼し鞭くれて夜の門を出づ

囀れる夜のカナリヤや軒納涼

乳しぼる牛不機嫌や朝曇

大ニグロにして善き隣花芭蕉

蒲の穂の衝く裏口の段梯子

かたくなに人形負へり汗疹の子

鳳仙花腕拱きて佇つ女

床下を草の稲妻走りけり

稲妻や隠れ家に似て移民小屋

日雇も天下の職や月の秋

鍬を打つ人を再び霧包む

背の荷のしげき夜露に驚きぬ

鳴いてゐる杜の夜烏や虫時雨

噛みついて籠に草履に露の蟻

露時雨群れ牛みちを溢れゆく

声曳いて野の犬歎く月の原

月細く天気きまりぬ男鹿鳴く

自ら森の木折るゝ夜長かな

月出でて野良の戻りの急がるゝ

年貢米曳く童にもコツプ酒

冬服を衝いて露はに肩の瘤

彼の背我を睨める焚火かな

鷹下りし牧柵丘を走るのみ

中空の鷹の降らする羽音かな

毛布背負ひ自覚時計提げてゆく

生死も五年一ト昔移住祭

パン竈と井戸の間を大根馬

汽車着いて駅にはじまる移住祭

誤字多き移民の投句瓢骨忌

牧牛や冬日の沼を戻り初む

眼に眼薬齒に齒薬や風邪の妻

支那捷てりと信ずる中の日向ぼこ

狩の舟空しく向を代ふるのみ

落葉掃く腕輪虚栄にしもあらず

焼き移る棉殻の上の群鴉

おのが糞乾けば食うて鶏の冬

や樹海隔てゝ分家して

草餅やわが家の不幸小さかりき

春の雨むすびて年の睫毛かな

階段に立ち現はれぬ朝寝人

春風や百羽の鶏冠炎え揃ふ

仔馬駆け親馬これを迎へ駆け

親馬の振る尾がくれの仔馬かな

貌のべて馬の嗅ぎたる接穂かな

扉を出でゝ狝春昼の階にあり

虻の輪や庇のうちにかゝりつゝ

昭和十四年

棉の花いつ加はりし野良の妻

日雇の條件にある昼寝かな

日を仰いで分け行く草の露涼し

馬解いて雷雨の牧に放ちけり

家空けて襲へる蟻をのがれけり

日照雨緑蔭の人書を閉ぢず

放ったらかしの夏蚕の出来に驚きぬ

仲悪しく旱の畑を笑ひ合う

仙人掌の針に凭れて眠り草

蜥蜴狩竈焚きつけて加はりぬ

一ト儲せずんばやまず棉を蒔く

群蟻の毬をなしてぞ流れゆく

一ト月も降り本雨季はこれよりぞ

露涼し自づと野良へ急ぎ足

夏草を焼く後ろより耕せる

日焼人椅子にもかけず火洒のめり

日焼子の日臭き頬よ頬擦りす

夏草や和語恋しさの立話

除草鋏放って暇をとる気らし

昼よりの洗足夜なべのミシン踏む

渡り鳥わが家の鳩も中空に

鶏と憩ひ秋燕と舞ふ庵の鳩

凶作の棉摘みかけてなげき合ふ

凶作や接ぎはぎズボン着て安し

凶作や此処いらいつもバス迅し

凶作の土間片付いてゐて琳し

蜜柑樹の見えて家路や馬車を駈る

鞍を置く人に頬すり馬肥えぬ

閉すよりけもの背をする夜寒の戸

荷車のもやひ鑑札農の秋

耳削ぐも風邪の牛の手当てとや

移住して東西わかず道落葉

犬居りて牛喜ばず牧焚火

振返る夕木菟顔を変へにけり

安物につくはわが性毛皮買う

ブラジルへ子に従いて来て味噌を搗く

息白く言葉短かに気むづかし

つかみ出す裸紙幣や毛皮売

毛糸編む靴先をのせ植木鉢

藁布団足伸べし音してをかし

干布団とつて釣瓶を下ろしけり

夜逃せる教師に延びし冬休

火襖の連り立てり大野焼

鳥の巢のなべてかゝれる木立かな

朝寝して下ろす深井の釣瓶かな

鍬に学び土に教はり耕せる

地に降りて枝に戻りて鳥交る

耕して居らんと畑へ道とれり

飼屋の灯遠し口笛ふと近く

どやしたる耕馬かなしく鼻取りぬ

鷹の巢や水皺もたてずゆくカノア

昭和十五年

繕ひかけし牛皮に臥せるおこりかな

夏草や投げ縄牛を獲つゝ行く

野に飼へる豚を流して夕立止む

早魃に牧馬も倒れはじめしと

蚤除の水を打つなり蚊火の宿

晚涼や虎女林の香に馬首を立て

鍬先をこぼるゝ笹や棉を蒔く

牧牛ををさめし檻の夕螢

灼け土にマッチ擲つ火酒の酔

実桑もぐ曳き来し馬にまたがりて

虚子門に無学第一灯取虫

汗寒く恐怖なしつゝ争へり

園廣し穴を噴き出る蟻の群

開拓のはてが籠編む夜なべとは

唐黍の紅毛の露あがりけり

虫高音わが馬鼻を鳴らし過ぐ

稲妻や奥地向ひ行く流れ

木零の身に入む斧を打ちにけり

夜食の戸たゝいて集ふ陸家鴨

ギタ可笑し夜なべの杵を打外す

萱負うて痛めし老の髯とかや

綿摘みの講習につぎ葡語夜学

森の木菟木わが斧近く来て猛る

森の木菟焚火明りを喜ばず

日雇いの一粒買ひの風邪薬

春風を斬ってたのもし老の鋏

飛行機の尻さがり来る春の虹

昭和十六年

炎天の野良より暇出されたり

萍の流るゝばかり釣しまふ

うつ伏せにされておとなし天瓜粉

馬にのる拍車結へし跣足かな

椰子の風鱈のおこせし波とかや

藤椅子に牧見廻りの鞭を置く

鼠出て宮守かくれし桂かな

舟の櫂かついで憩ふ木陰かな

香水や鳥声に似て異国の語

梅雨の戸身を打あてゝ開けにけり

月を見る火酒は一気に飲むべかり

深霧に立どまりては行きにけり

女房は琉球女木葡萄酒

狩出せし鹿に拳を喰はしぬ

枯野より犬這入り来ぬ汽車の中

着ぶくれてよゝと運べり飼馬槽

切符買うて囊中空し日向ぼこ

さきがけて遠くの耕馬戻り来し

担ひ吹くラツパ上向蝶の野路

分家する隣畑に桑を挿す

流あれば故郷めけよと柳挿す

花珈琲門入りてなほ馬に鞭

青空へ首のり出せし巢鳥かな

春水をわたるカノアや園の内

野焼人沼をわたりて集ひけり

春燈や柱を巻いて帽子掛

居眠れる馬に鞍置く虻の昼

昭和十七、八、九年

産すみし牛にビールを飲ますとて

油虫裸ランプは手くらがり

騎初を追ふ子倅の裸馬

信あれば文は短し秋灯下

朝露をこぼしてしまる牧扉

枝の木菟足を揃へし目鼻立

けつと着て日の出さし行く牧人等

昭和二十、二十一年

喜雨の戸を凭れ倒して雨宿り

朝酒のあとの腹減る喜雨休

夏虫や移民等の集る久しぶり

乳しぼる牛にさし来し初日かな

蛇蜥蜴からみ搏つなり草の中

腹這うて犬も飽きたり蜥蜴狩

つなぎ馬尻を向け居り日傘さす

夜深く泊りし馬車や露の宿

凶作を云へば叱りて夫早寝

野猪除けの扉をつけて丸木橋

牧乾季川越えて来る馬探し

移民妻大かた古び移住祭

移住祭日本人会解きて久し

薪を割る木屑はりつく干毛布

算盤は東洋の芸日短か

巻釣瓶はじまり鸚鵡朝の木に

野良戻り牧場戻りと庭焚火

昭和二十二年

騎初め牧の扉の殖えしこと

棉蒔にギターを弾いて手間貸さず

薫風や金庫に立てて小国旗

螢火や夜目に見え来し牧扉

螢火や柵をはなれし牧の道

聖堂の人扉にもたれ雷雨見る

今日も亦秋暑かりし鞍を解く

放れ馬二匹となりぬ秋の雨

涸瀧の裏の山なる斧の音

土つけて涸井の釣瓶あがりけり

汽車に会ひ牡蠣飯に又日本人

クリストの弟子の祠や冬木立

倒れ木を支へて森の枯木かな

毛糸編んで昨日の如しベンチ人

投かけて四方の窓に布圈干す

焚火して瓢骨旧居誰ぞ住める

巖壁の武人の像や浮寝鳥

木がくれに年のさまよふ牧乾季

屯ろして他所の牛ゐる牧乾季

野火防ぐみちを通りて水貰ひ

空中のわが楼閣に囀れる

酔うて脱ぐ大きな靴や春灯

対岸の野火にも備へ牧守れる

牛耕や群れ移りして野良の蠅

大野火の端の明りの戻り馬車

汗かいて鹿毛栗毛なき耕馬かな

朝酒をして来し父と種を蒔く

移民妻わらびを干して気品あり

戸を打って朝寝起きして勤め合ふ

木がくれに親がくれゆく仔馬かな

下萌や切株とりし穴太く

春泥を踏んで靴屋を出でにけり

ベランダをつけたしてより蜂の来る

囀りや林の中の苗木畑

馬の子が欲しくてならず従いてゆく

洋館はわが憧れよ柳の芽

馬生れし牧の銃音憎みけり

昭和二十三年

肉馬車に従く犬のむれ梅雨あがる

没収を免れし和書曝しけり

道銭を取る野の家や飛ぶ螢

駆けまはる牧馬に咲けりアマリリス

担ひ来し水に嘶き馬肥ゆる

ブラジルに陋巷はなし新豆腐

猿酒を覆ふ皮にも似し葉かな

ちゝろ虫古き時計は音高し

冬仕度妻の望みの小さけれど

休めある牛車にかけてけつと干す

襟巻や紳父と競ふ拓士髯

帰り咲く桃にすももに移り住む

飛行機に乗りてまかりぬ圭石忌

粕汁の座に天杯のまはり来し

茶の村の花茶日和に来しわれ等

都にも書店乏しく国麗ら

鳥交む果てしなく行く野路の辺に

墓参して和語を話さぬ移民の子

昭和二十四年

藻をとほしさをす日に金魚暈まとひ

新しき村の同志と鋤始

瓜漬を食ひ結飯食ひ珈琲飲む

蜥蜴狩バナナ林に移りけり

椰子帽子そびらに乳の張って来し

羅のひらひらと辻馬車待てる

竹落葉舐めて旱の放れ馬

獣鳴くを真似て訪ひ合ふキャンプかな

唐黍にかくれし伏屋訪ひにけり

庭残暑故山を模して岩多く

覗き去る顔に覚えや菊の垣

長雨のあがる風吹く鳥威

鳥威と別に魔除の竿高く

お辞儀する日本移民に毛見来る

こほろぎや床に唾吐く椅子の客

もんぺ穿く信濃移民や蕎麦の花

竹伐るや倒れ遅るゝ二三本

ズボンの娘モンペの母と井戸端に

かまつかを活けて移民の軸古りし

肉馬車を追ふて地を翔つ秋の蠅

破芭蕉照らして着けり川蒸汽

枝々の山羊にとどかぬ千葉かな

茎の石山羊舐めしとて洗ひ居り

バスよけて獲物のあらぬ狩人等

角笛や森に鳴きやむ狩の犬

干布団野飼の牛の戻り初む

布団干して牧場の方へ手をかざす

夫掛けてソファのはづむ糸編

糸編む車窓を過ぎし通過駅

病人も腹減りとぞ草の餅

別々の木にのぼりゐて猫の恋

珈琲の花の山々駅の上

流れ来る珈琲の花に濯ぎけり

貫ひ水朝寝の窓に声かけず

老いてゆく夫に朝寝の妻若し

焼谷へなほ燃え倒れ落つ木あり

叢をたわめて鋏の倒れ居り

春泥や取まいて追ひつめし豚

嘘のごとはや二十年耕せる

切株に一と荷づゝのせ蕨狩

昭和二十五年

水団扇日本通の君知るや

干瓢干す裏口を出るトラクター

倒れたる馬に人佇つ濃霧かな

荒蕪地の驚く高値猩々花

赤インキ街路に流れユダ搏たる

秋夕立三萬株のバナナ園

柿の影さして障子といふものぞ

騎入れて馬の倒せし枯芭蕉

秃鷹の歩みて牧に牛居らず

逆落としつゝ秃鷹の睦み合ふ

釣橋を行きて袖消ゆ冬霞

立寄りし人に焚火を任せ寝る

冬ぬくし池かちわたる牧の騾馬

冬晴の塀にネクタイ吊りて売る

粕汁や算盤はじく無尽講

炭とりに盛つて空きたる俵かな

ギタ弾いて道に憩へり花珈琲

群牛を追うて虻の輪高々と

木諸植う切株取りし穴の中

土を掘る豚に怒れる土蜂かな

鎮火してなほ漕ぎ集ふカノアかな

昭和二十六年

立ち乍ら数へて足らず草布団

鞆持つ人の踏まへし草布圃

ジャスミンや刻々繁き夜の自動車

梁に吊る預り椅子や夏山家

茸の名長し木の名と少し似て

秋出水溝作りゆく機械かな

露の牧牛に出会はず越えにけり

露寒し門までに早靴濡れて

雁ほどの鸚鵡渡るや棹なして

垣根なき隣に近く大根蒔

息吹いて汽罐休める夜食かな

牧ならぬ鬼針金や草紅葉

井戸掘ってゐるを見に来し新移民

移民船隈なき月に沖がより

吊るし猪切るを仰いで炉辺の人

ストーヴや芸者を書きしポ語の本

倅せとは世知らぬことか木の葉髪

隙間風家訓掲げて家富まず

虚子の書く子規を偲びて祀りけり

糸瓜忌を明日に俳句の旅終る

蜂の毒耳ひっぱって耐えてをり

噛み合へる蜂飛わかれ吾を刺せり

蜜蜂に処女林の花何々ぞ

波間より飛び翔ち連れて引く鳥よ

引く鳥を追ひつゝ獵の名残かな

名乗り出し甥が案内の猟名残

恋人の父を案内や猟名残

おぼろ影電髪にして帽の如

春愁や羽づくろひして籠オーム

春夜行くポ語を知らねば聞ながし

昨日まで時を惜みし朝寝かな

帆にも似て馬車の幌行く木の芽坂

鍬持って卑しからざり春の風

赤き布柵になげうち鬪牛果つ

朧月なりし約束の門を出づ

魚を売る秤吊るせし柳かな

ユゝカリに覆はれ古き柳かな

転耕を見送るや馬とばしつゝ

舟の発つ洲までをわたる春の水

馬の脊の籠にあたりて燕来る

春の宵迎へ自動車刻違はず

春宵や庭歩きして老夫婦

三步にして掘りゆく穴に木の实植う

耕や廿五年の切株と

跋

ブラジルに移住して丁度二十五年になる。生れ故郷の新潟県笹岡村からサンパウロ州奥のアリアンサといふ移住地へまっすぐに入植したのは昭和二年、三十歳の時であったが、今は六人の子女の親となり、更に、父と母と弟の三つの骨を比の地に埋めて、自らは五十五歳になった。もう此のブラジルから何処へ行けるものでもない。

此の年月には、ささやかな自作農としてではあるがいろいろのことをやった。最初に原始林を開発して珈琲を植ゑ、陸稻を作り、とうもろこしを作り、豚を飼った。が、みんな失敗であった。

といふのは、うちつづく霜に珈琲は枯らされ、米や豚は只のやうに安い年が何年も続いたから

である。つぎに綿作をやった。棉作といっても、今日のやうに何も彼も機械の力でやる時代ではなかったのだ、俄百姓の私には珈琲作りや豚飼より一層難儀であつた。そこで私は追々とその地に牧草を殖して、今では牛飼ひとなつて居る。

私は漁村の小さな商ひ屋に育つたが、商業を身につけたわけでもなく、学業も小学校を終へた丈けの、何一つとして身におぼえもなくブラジルへ来た者であるが、思へばここでも亦・何をしたといふこともなく人生の大半を過ごしてしまつたわけである。だから、私の俳句は無学かつ碌々たる一移民の生活記録にすぎぬもので、世人の鑑賞にたへるやうな句は一つもない筈である。

しかし、俳句こそは私の生命のやうなものだ。今、この二十五年を振り返つてみても、先には

過労のために、後には戦争のために句の作れな
かった時もないではなかったが、ともかくも俳
句によって慰められ励まされて、僅かに生き甲
斐を感じて来たとしか考へられん。とすれば、
もはや句の巧拙などはどうでもよいやうな気が
して、たまたま友人たちのすすめるままに一冊
とすることにした。

本集の上梓に当っては三十年来の恩師、虚子
先生に特に乞うて拙句の選抜をしていただき、
その上に序文を賜り川璃龍子画伯にはホトトギ
スの縁故により装画をお願いして、共に本集を
飾ることができた。

又、虚子先生と共に私の恩師である中田みづ
ほ、高野素十両先生の御鞭撻と、荒垣冬虚、宮坂
幾別春両氏のなみなみならぬ御世話と、暮しの
手帖社の方々の多大なる御厚意と、新潟まはぎ
会の若月南汀氏が校正その他に与えられた御援

助に対し、ここに衷心感謝の意を表する次第である。

昭和二十七年十一月二十二日

ブラジル、アリアンサ草庵にて 佐藤念腹

念腹句集 定価三百五十円

昭和二十八年三月二五日印刷 昭和二十八年四月一日発行

著者 佐藤念腹

発行者 大橋政子 東京都中央区銀座西八丁目五番地

発行所 暮しの手帳社 東京都中央区銀座西八丁目五番地

印刷者青山興三次郎 東京都港区芝愛宕町二丁目八五番地

印刷所 青山印刷株式会社 東京都港区芝愛宕町試丁目八五番地

製本 清水茂登吉